

**【目的】** 看護学生の同学年間協同学習は学力向上に影響を与えたが「学生間の連携」に課題が残った(第1.2報)。今回は学生間の連携と学力向上のためピアチューターを上級生が担う異学年間協同学習を計画した。そこで、一体感が得られ意見も出やすいとされるワールド・カフェ方式での異学年交流により、学生の連携を図り交流が深まるのかを調査した。研究目的はワールド・カフェ方式での異学年交流が学生間の連携に及ぼす影響を明らかにすることである。

**【方法】** (1)デザイン:質的研究

(2)時期:2019年6・7月ワールド・カフェ実施前後

(3)対象:1年生99名と2年生96名

(4)方法:無記名自記式質問紙調査と自由記載

(5)分析:学生の自由記載からKHCoderを用いた計量テキスト分析を行う。

倫理的配慮として研究趣旨を説明、匿名性質問紙調査の回収をもって同意とした。関西看護専門学校倫理委員会の承認を得た。

**【結果】** 回収率96%。計量テキスト分析の結果、頻出語は「楽しい」「先輩」「お菓子」で、共起ネットワークの中心であり「交流」「出来る」「機会」「勉強」「ありがとう」が強い共起関係にあった。実施前には「楽しむ」「楽しみ」という記述と共に「正直」「嫌」「不安」「時期」「面倒くさい」の否定的な語句もあった。実施後では「楽しい」「優しい」「雰囲気」「ありがとう」「聞ける」「出来る」「話せる」の肯定的な語句(総頻出回数176回)があがった。学年別で見ると1年生は「優しい」「先輩」「分かる」「質問」「緊張」、2年生は「自分」「新たな」「発見」「国試委員」「雰囲気」の語句が目立った。

**【考察】** 人間関係が不安定な1年生は、緊張しながらも2年生との関係を築くことができ、2年生は国試委員の自治活動や1年生の学習姿勢に触れることで新たな発見を得ていたと考える。異学年交流の実施前では否定的な記述もあり、交流への期待と不安や回避したい気持ちが混在していた。しかし、実施後は楽しさや優しい雰囲気の中で安心して意見交換ができ、お互いを刺激し尊重し合えたことで感謝の気持ちが芽生え、それが連携を養う基盤になっていると考えた。更に学習についての肯定的な語句の頻出回数も多いことから、ポジティブな感情は学習の向上心を高めていたと推測する。結論として、ワールド・カフェ方式での異学年交流は学習の向上心を高め、学生間の連携に効果的であることが示唆された。